

o n j o u r n a l s

アラミスと
呼ばれた女

宇江佐真理

潮出版社

B o n j o u r , A r a m i s

アラミ
呼ば
宇江佐真

江苏工业学院图书馆
藏书章

潮
出
版
社

U e z a M a r i

宇江佐真理（うえざ・まり）

北海道函館市生まれ。1995年「幻の声」でオール
讀物新人賞受賞。2000年「深川竜物語」で吉川英
治文学新人賞を、01年「余寒の雪」で中山義秀文
学賞を受賞。近著に「たは風」「無事、これ名馬」
などがある。

アラミスと呼ばれた女

2006年1月5日 初版発行

著者／宇江佐真理

©Mari Ueza, 2006 Printed in Japan

発行人／西原賢太郎

発行所／潮出版社

〒102 8110 東京都千代田区飯田橋3 1 3

電話／03・3230・0781（編集）03・3230・0741（営業）振替口座／00150 5 61090

本文印刷・付物印刷・製本

大日本印刷株式会社

★

ISBN4 267 01736 0 C0093

落丁・乱丁本はお取り替えいたします。

[http //www.usio.co.jp](http://www.usio.co.jp)

アラミスと呼ばれた女

肥前長崎は坂の町である。どこもかしこも坂だらけ。

長崎は海に向かって続く細長い岬状の大地にあったことから「長んか岬」と呼ばれ、それが地名の由来ともなっている。

島原町、平戸町、大村町、横瀬浦町、外浦町、文地町の六町が最初にできた町である。

その後、ここに集まった商人達によって興善町、豊後町、桜町、樺島町、五島町、築町が造られた。

天正八年（一五八〇）、長崎はイエズス会の領地となり、キリスト教の中心地として発展した。しかし天正十五年（一五八七）に鹿兒島の島津氏が豊臣秀吉に敗れると、バテレン追放令が出された。バテレンはポルトガル語のバードレのことだが、日本人はいつの間にかバテレンと呼ぶようになり、今ではポルトガル人だけでなく外国人宣教師の総称ともなっている。後に長崎は茂木浦上とともに幕府の直轄地となった。

「日本は神国たる処、きりしたん国より邪法を授け候儀、太以って然るべからざる候事」

ひとつの法令で信者達がすぐさま信仰を捨てられるはずもない。しかし、以後、日本が鎖国政策を解くまで、キリスト教の信者達への弾圧は続いた。目を覆い、耳を塞ぎたくなるような処刑の話は、長崎周辺の土地に極めて多い。それは信者の多さを物語るものでもあった。

虐げられた人々の悲しみに彩られているから、なおさらこの地方の風光明媚さは際立っているのだろうか。三年ほど前に長崎に來たお柳は、明確には言葉にできなかったが、そんなふうに思っていた。

土地の者は坂に慣れっこなっているが、お柳の母親のおたみは江戸暮らしが長いので、時々愚痴をこぼす。ほんの一町、買い物から戻ってきてても大袈裟に荒い息をついた。

安政三年（一八五六）、十歳のお柳は、この土地になじみ、今では坂も当たり前のようになっている。言葉もすっかり長崎訛りである。お柳は、おたみの代わりに内職の縫い物を客に届けたら、坂の上にある店にお使いに行くことが多い。

その日も父親の平兵衛が上司に付け届けをするため山の手の酒屋に出向いた。

父親の上司とは出島のカピタン（オランダ商館長）のことである。平兵衛は出島でオランダ通詞（通訳）を務めていた。通詞には階級があり、平兵衛は最下級の「稽古通詞助」より少し上の「小通詞並」を仰せつかっている。

「いとも尊敬せるカピタン殿。

ここに日本酒を少々、贈らせてください。

いとも尊敬せる貴下の僕しもべ 田所平兵衛

平兵衛はオランダ語でしたためた小箋こせんを添えてカピタンに差し出すのだ。それはカピタンが平兵衛にフランス語を指南してくれる礼だった。オランダ語は幕府の公用語となっていたが、日本がアメリカやフランスと和親条約を結ぶと、アメリカ人やフランス人も長崎を訪れるようになり、英語やフランス語が必要となってきたのだ。

カピタンは仕事の合間に（主に午前中）出島のオランダ通詞へフランス語を指南していた。

カピタンへの付け届けはオランダ正月、オランダ国王の誕生日、また、近所から新鮮な魚介類の貰い物があつた時などで、平兵衛は他の通詞達と競うようにしている。カピタンからは時々、コンパンヤ（調理部屋）にあるパンやミルク、砂糖などが与えられる。異国の食べ物をいち早く口にするのはオランダ通詞かも知れないとお柳は思う。

酒屋「平野屋」の番頭はお柳に愛想のよい笑顔を向けながら「お父ちゃんの晩酌ね」と訊く。平野屋は造り酒屋で、店の奥で酒を造っている。平兵衛が最前ひいさきにしている店だった。

「ううん。カピタン様に差し上げるとよ」

お柳は、こまっしゃくれた口調で応える。小柄なお柳は同じ年頃の少女達よりも幼く見えるらしい。五合徳利を差し出す時、番頭は家まで持って帰れるのかと心配した。お柳は大丈夫と胸を張った。

「ほうか。異人さんでも日本の酒ば飲みよつとね。ばってん、うまかと言いよつとね」

「うち、知らん。何んでも、うちのお父ちゃんはこの頃、カピタン様にフランス語を習うとるけ

ん、そのお礼じゃと言うとった」

「フランス語……」

番頭は驚いたように眼を大きくした。それから早口で「その内な、この近所も埋立しよって、異人さんの旅籠^{はたご}やら料理屋やらが建つらしいで。それで、フランス寺も建つという噂もあるとよ」と、続けた。

「それはヤソの神さんの寺ね」

「ああ、そうや」

「ヤソの神さんを信じとったら、お上^{かみ}に罰を受けるとやろ？」

「そんなでもな、時代が変わって昔と違ごうて取り締まりも緩^{ゆる}うなったけん、今まで隠れるようにしとった人も、この頃はたびらにヤソの歌をうたいよるとよ」

「恐ろしか。うちはようできん」

「そうやそうや。お柳ちゃんは日本の神さん、仏さんを信じとったらよか」

「うん。お代は幾らね」

「へい、毎度おおきに。百文になります」

お柳は帯の間に挟んでいた紙入れから百文を取り出して番頭に渡した。

「お柳ちゃん、おおきに言うんはフランス語でどげん言うと同じやろう」

「メルスイヤ。丁寧に言う時はメルスイ、ボクと言いよるとよ」

「たまげたなあ。お柳ちゃんは門前の小僧、何んとやらのごたる」

「うち、お父ちゃんより物覚えがええねんで」

お柳は得意そうに言う。

「そんなら、フランスのバテレンさんが来よった時は、お柳ちゃん、おいにフランス語ば教えてくれんね。挨拶ぐらいせないけんで」

「よかよ。その代わり、お酒ばおまけしてね」

「敵かなわんなあ」

番頭はそう言つて声を上げて笑つた。

「あ、転んで徳利を落としたらいかんけん、氣いつけてな」

「メルスイ。ア、ビヤントー（じゃあまた）」

流暢りゅうちやうに応えたお柳に番頭は眼を細めて笑つた。

平野屋を出て石段を下りながら、お柳は、つと足を止めた。よく晴れたその日はそこから青い海が眺められた。視線を右に向ければ扇状の出島も見える。出島は日本の異国だとお柳は思う。

鎖国政策が取られている日本で、その出島だけが唯一、世界に開かれた窓だった。だが、窓はあちこちでも開かれつつあった。

（うちが男だったら通詞見習いに出るのに）

お柳は胸で呟つぶやいた。出島には見習いの通詞の少年達もいた。しかし、父親の平兵衛はお柳の方がずっとできると褒ほめ上げる。

「なあ、お父ちゃん、うち、大きゆうなったら通詞になりたい」

お柳は眼を輝かせて言った。しかし、平兵衛は、出島は女人禁制だから、それは無理だと応えた。出入りできるのは丸山^{まるやま}辺りの芸者や遊女ばかりである。妻を同行できなかったカピタンやヘトル（商館長次席）の夜の無聊^{むりょう}を慰めるためにそうした措置が取られている。

昔、出島にいたシーボルトという医者は長崎の娘と恋仲になったという。おたきという娘は遊女の届けを出して出島に通っていたらしい。

うちもその手を使おうかしら。お柳はそんな大胆なことも考える。だが、それはお柳が通詞として一人前になってからの話だ。父親が家に戻って来たら、英語とフランス語をさらって貰おうと考えると、お柳は石段を下った。徳利の酒がその度にたふたと音を立てた。

二

出島の歴史は古い。寛永十一年（一六三四）に幕府はオランダ人を隔離する目的で長崎^{まちどし}の町年寄^{より}高木^{たかぎ}作右衛門^{えもん}に出島の造成を命じた。キリスト教が拡まるのを防ぎたいがオランダとの貿易は続けた。苦肉の策として幕府は出島を必要としたのだった。

作右衛門は自分を含める二十五人の町人に出費を募り、出島が完成した。それは長崎奉行所にほど近い長崎湾に浮かぶ総面積およそ三千九百六十九坪、南側百八十間余、北側九十六間余、東西三十五間余の扇状の島だった。

お柳は長崎生まれではなかった。江戸は下谷^{したや}御徒町^{おかちまち}三味線堀^{やみせんぼり}、柳川横丁に生まれた。お柳の名

は柳川横丁に因^{ちな}でいる。父親も母親も江戸の人間だった。

平兵衛はもともと通詞ではなく鋳^{かぎ}職人をしていた男だった。

カピタンは春になると將軍に謁見するため江戸へ参府するのが慣わしである。將軍に献上品を贈って貿易に対する謝意を示すのだ。

正月に長崎を発ち、三月に謁見するため江戸入りするカピタンの行列は江戸の春を告げる風物詩ともなっている。カピタンが江戸で滞在するのは本石^{ほんごく}町の長崎屋という異国人向けの旅籠^{はなご}だった。

將軍と謁見を済ませても江戸の蘭学者、医者、幕府の役人、諸大名が訪れ、カピタンは気の休まる暇もなかった。しかし、長崎では待っているなじみの芸者や遊女達の土産に着物や帯、櫛^{くし}や簪^{かんざし}などを用意することは忘れない。

本国から持ってきた宝石を簪に作らせることもあった。鋳職人の平兵衛にその仕事が回って来ると、平兵衛はカピタンの要望に応えるべく、通詞を介してあれこれと質問した。

平兵衛の丁寧な仕事はカピタンを喜ばせた。

毎年注文が来る内、平兵衛は片言のオランダ語を遣うようにもなった。通詞を介しての会話がまどろこしかったせいもある。そこはせっかちな江戸っ子だった。

平兵衛には語学の才があったのだらう。一時は蘭学者の塾にも通ってオランダ語を習ったこともあったという。平兵衛はオランダ語を幾らか話せるようになって、通詞になろうと思っていた訳ではない。あくまでもそれは商売^{べんぎ}の便宜のためだった。

だが、オランダ語を操って商売をする平兵衛は町内でも評判になり、やがてそれは幕府の役人にも聞こえるところとなった。

平兵衛の転機は嘉永六年（一八五三）に訪れる。まさにこの年はアメリカのマシュー・カルブレイス・ペリーが黒船で日本に開港を迫った年でもあった。この時から日本は急速に近代化へ向かうこととなるのだ。

異人との交渉に通詞の役目は欠かせない。通詞は平戸にオランダ商館が設置された頃より存在する。しかし、長崎はともかく、江戸にはその任を務める者の数が不足していた。

俄か仕込みのオランダ語を話す平兵衛にまでお鉢が回って来たのは時代の流れでもあったろうか。

平兵衛は稽古通詞として幕府に召し抱えられた。それだけでも当時としては驚きであったが、さらに小通詞末席、小通詞並と出世して、出島詰役を仰せつかるに至った。お柳が七歳になった頃のことである。平兵衛は嫌がるおたみと幼いお柳を引き連れて長崎にやって来たのだ。

長崎には平兵衛が舌を巻くような通詞がごろごろいた。代々、通詞を仰せつかる家に生まれた者は生まれた時から異国の言葉になじんでいる。そういう者は大通詞として貫禄も違う。年番と呼ばれる通詞は大通詞と小通詞の加役で、それぞれ一名が一年間、その任に就く。長崎奉行所とオランダ商館との連絡、折衝をするのだ。カピタンの江戸参府に同行して世話を焼くのは江戸番通詞だった。

しかし、通詞の役目はそれだけではない。入港するオランダ船の検査、上陸者の点呼、積み荷

の目録作り、オランダ風説書ふうせつがきの翻訳、果ては出島のオランダ人への遊女の斡旋わくせんまで多岐に亘わたった。もちろん、交易の取り引きの時にはすべて立ち合った。小通詞並としての平兵衛の仕事も長崎に赴任した時から繁忙を極めていた。

三

平兵衛の住まいは出島の近くの築町にあった。古い民家だったが幕府が長崎奉行所を通して平兵衛に与えたものである。

平兵衛は特別な仕事がない時は暮六つ（午後六時頃）に家に戻ってお柳と一緒に晩飯を摂とった。平兵衛はいつも何かしらの土産をお柳に持って来た。ふかふかのパンやミルク、オランダの菓子。おたみには砂糖やシナ茶だった。家の調度品も年を経るごとに異国風となっていた。お柳が気に入っているのは床の間に飾られているオランダの女性の絵だった。

レースの飾りのある上着に緑色のスカートを着け、頭にローズの花を飾っている。手には小さな斑まだらの犬を抱いていた。何んでもシーボルトが国外追放となった年に訪れたデ・フィレネーフエというカピタンの奥さんのミミーという女性であるという。

出島は夫人同行が許されなかったので、ミミーは間もなく本国へ戻されたが、短い滞在中、長崎の絵師はミミーの姿をこぞって描いた。その絵は版画となって何枚も刷られたらしい。近くの商家でも同じ絵が飾られている。

平兵衛はミミーの絵を表装して掛け軸に仕立てた。

異国の女性の美しさは日本の女性よりはるかに勝^{まさ}っているとお柳は思う。白い肌、紅毛、碧^{あお}い瞳。

たとえて言えばミミーの美しさはその頭に飾るローズの花のようで、カピタンのなじみの芸者の糸萩^{いしぎ}とは比べものにならない。糸萩は出島にある団扇^{うちあ}サボテンのように野暮に見えた。団扇サボテンはその名の通り、平べったい楕円のサボテンである。お柳は友達とお喋りをする時、不細工な人や物に対して、団扇サボテンと扱^さき下ろすのがもっぱらだった。

お柳はミミーの絵が好きだったから、おたみに「うちのことミミーと呼ばんね」と言って笑い飛ばされた。だが、平兵衛は機嫌のよい時、お柳を「ミミーや」と呼ぶこともあった。

平野屋にお使いに行った夜、平兵衛はお柳を「お使いして偉かったな」と褒めてくれたが、その夜は珍しく晩酌もせず、晩飯を終えると熱心に手紙を読んでいた。手紙は江戸から届けられたもののようだった。

「おたみ、おたみ」

平兵衛は手紙を読み終えると少し昂^{たか}ぶった声で台所にいたおたみを呼んだ。

「何んだねえ、大きな声で」

おたみは眉根を寄せて台所から顔を覗かせた。

「榎本の坊ちゃんが長崎に来るらしい」

「どっちの坊ちゃん？」

「二番目の方よ」

「そいじゃ、釜次郎さんだ。で、釜次郎さんは長崎に遊びにいらっしゃるのかえ」
呑気に言ったおたみに平兵衛は癪を立てた。

「おきやあがれ、釜次郎坊ちゃん、海軍伝習所の生徒としていらっしゃるんだ」

平兵衛が怒鳴るように言うと、おたみは、呆氣に取られたような顔になった。

「何かの間違いじゃないだらうね」

そんなことも言う。

「間違い？」

平兵衛は怪訝な目でおたみを見た。

「だってさあ、あの坊ちゃんは湯島の学問吟味だってうまく行かなかったし、昔は悪戯ばかりして奥様に怒鳴られていた子だよ」

「まあ、伝習所も補欠という扱いだが、それでも生徒は生徒だ」

平兵衛が取り繕うように言うと、おたみはそれごらんといい顔になった。

「心配だから榎本の旦那様がよろしくと言って来たんだろ？」

「まあ、そういうことだが……」

お柳はフランス語の単語帳を見つめながら両親の話を聞くでもなく聞いていた。

トレズルーズ、ドゥヴ、コネートルは、お知り合いになれてよかったという意味だが、女性が

言う場合と男性が言う場合は違う。

「お父ちゃん、うちがトレズルー、ドウヴ、コネートルと言うたらいけんとやろ？」

「お前はおなごだからトレズルーと喋るんだ」

「何んで？」

「うるさい。ちいと黙ってろ」

「パルドン（すみません）」

お柳は低い声で謝った。

「ス、ネ、リヤン（いいんだよ）」

平兵衛は慌てて返答する。おたみがくすりと笑った。異国の言葉でお柳と平兵衛がやり取りするのは、もう珍しいことでもない。

「釜次郎坊ちゃんは一昨年、お目付の堀織部正様に随行して蝦夷地とカラフトを廻ったらしい。それで、今度ア、長崎だ。旦那も大層期待しているらしい」

「まあ、そうなんですか。わからないもんですねえ。あの坊ちゃんがねえ……」

おたみは独り言のように言う。榎本という名字は、お柳も平兵衛の口から時々聞くことだった。^{かぎり}鋳職人をしていた頃、平兵衛は榎本家から大層鼻屑にして貰っていたからだ。榎本家も平兵衛の住まいと同じく三味線堀にあった。平兵衛の仕事は榎本家の妻や娘のために簪を拵えることだった^{あるし}が、平兵衛はそれより、主の円兵衛の人柄に魅かれていたようだ。

榎本円兵衛は下級の御家人ながら独学で測量学を修め、伊能忠敬の弟子となって日本全国を測量して歩いた。忠敬亡き後は「大日本沿海輿地全図」の完成に尽力している。円兵衛はその功績